

# 岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-32 関市小屋名  
(百年公園内)  
岐阜県博物館内  
岐阜県博物館協会  
TEL(05752) 8-3111(代)  
振替 名古屋 6 37909



## 博物館は何が展示してあるの？

### — 学校教育と博物館 —

小中学校の教師を経て博物館に来た一人として、痛切に感じることは、学校とのつながりが薄いことである。

小中学校時代、正直言って博物館を理解していなかったし、必要としなかった。まして、博物館がどのような役

割りを担っているか考えようとしなかった。それより、主体性を育てる教育とか、学習することの楽しさや、できた喜びを持たせる教育とかをテーマにしながら、一時間という授業の範中で考えてきたように思う。頭の中では、豊かな人間の育成とか、豊かに自然を見ることのできる子どもの育成などと考えながら、現実には、教師主導型の解答を要求するだけの教育であったり、中学においては、高校入試のための手段化された～のための教育に終り、フクロウを知っているもフクロウを知らない子どもにしてきたような気がする。

先日、中学校理科教育シンポジウムに参加する機会を得た。「直接経験を重視した理科指導のあり方」がテーマであった。理科において直接経験の大切さは普遍の真理であろう。「もの」に触れ「もの」を見て考える。そこには驚きと発見がある。博物館こそ豊かに「もの」があるのではないかと思ひながら、文部省教科調査官の山極隆先生の講演を聞いた。「日本ほど博物館を学校が利用していない国はない。諸外国では、学校の先生が博物館へ行きなさいと勧めている

し、子どもも自分の課題を持って学習に来ている。これからは博物館を大いに利用しなければいけない」と言われ、課題とされた。

博物館の歴史の浅い日本では、努力しないかぎり、しょせん館にすぎず、機能しないだろう。今、博物館は、教育機関であることを再度認識する必要があるのではないか。学校教育の中で博物館の存在が忘れられることがあってはならないし、それ以上に博物館を学校教育の中で位置づけていく必要がある。学芸員は、研究者であり、学校現場の要求に応じられる教育者でなければならない。同時に学校教師も博物館を知らなすぎる。私がそうであったように、博物館に何も求めようとしない。博物館すら訪ずれたこともなく、「博物館には何が展示してあるの」と聞く教師が多いのも現実である。

一度でも博物館で研修すると、学校では不可能な資料や情報に接することができるはずだ。第一歩は、教師が博物館で学ぶことから始まるのではないか。県内各地に博物館や類似施設は多い。それなりに内容も充実し、収蔵資料も多くなったはずである。学べば、何か引き出せる。そして、得たものをどのように還元するかは、学級を持っている教師自身ではないだろうか。もちろん、学芸員も子どもの発達段階に応じた博物館教育カリキュラムを用意する必要があるが、あくまで子どもを理解している担当教師が子どもの実態に適したカリキュラムを編成すべきだと考える。(S.A.)

川島町ふるさと史料館

〒483 羽島郡川島町松倉町 1951の4

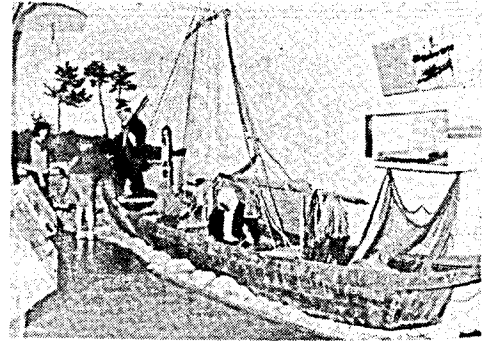
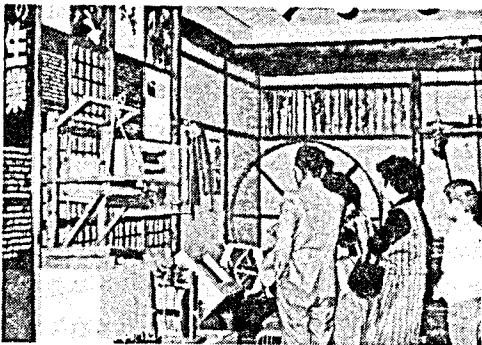
TEL 058689-2811 (代)

〔川島町民会館4階〕

社会教育、生涯教育で先進的な実践活動を推進してこられたことで名高い川島町に、「歴史民俗資料館」が誕生しました。川島大橋のそば、木曾川の左岸沿いに建てられている「町民会館」の4階に完成したもので、この建物の中には町立図書館もあります。“川島町ふるさと史料館”、“川島町ほんの家”の呼び名にみられるように、学習主体者である住民の側に立っての発想の教々が、この町民会館内の諸施設に見られます。実物資料をもっている史料館と、文献図書資料の活用である図書館とが同居している点、まことに利用者側にはありがたいことです。

常設展示室に入ると、まず川島独特の「岡田式わたし」が目に入ってきます。実物の帆掛舟が使われ立体的に展示され人目を引きまします。展示テーマには、産業（織物・養蚕・燃糸など）生活、祭、考古、洪水、歴史、現在の産業、川島町の遠望などがあり、スライド、VTR、音声等もうまく使用され、展示室全体がよく洗練された技法で統一美に満ちています。多くの町民の方々から寄せられた資料が、ガラクタとして燃やされれば消え去ってしまったはずのものが、ここでは生命をふきかえし輝きをもっている

（川島の生業の展示コーナー）



（木曾川：渡し船の立体展示）

るように見受けました。新しい試みでしょうか、ここでは、収蔵庫も公開されており、整理された生活道具、生産用具、衣服、履物に至るまで、町の先人が使用してきた品々を手にして見学できるようにになっています。

ただひとつ残念なことは、小じんまりとよくまとまっているのですが、それだけに常設展示室が狭すぎる点です。この倍の面積があったらなあーと思えてなりません。息つくひまもなく、一室にとじ込められたなあーといった感じがぬぐえず、ほんとうに惜しまれます。

県内各地に多く誕生しつつある歴史民俗資料館の中では、鮮やかな展示空間を実現していて、親しみやすいものです。今後、これまでの社会教育、生涯教育の諸事業諸活動の中に、このふるさと史料館がどのように位置づけられ、さらには、郷土の歴史と文化を知る“自己学習”の場として、新しい川島町民の実践活動が推進されていくのか、大変注目されます。開館時間は18時30分～16時30分、毎週月曜日、祝日が休館、年末年始も休館、入館は無料です。

（自由に入室し見学できる収蔵庫）



## ひだ自然館と 昔ばなしの里

▽ 吉城郡上宝村福地

田 ひだ自然館 0578-9-2462

昔ばなしの里 0578-9-2793

ひだ自然館といえば、太古のロマンに満ちた化石を恋人のように想う個人山腰悟氏のご努力によって整備された教化施設で、化石センター、地史展示館、博物館、それに化石の産状が自然のままに観察できる自然探勝路等を含んだ全体的なことです。そこへ、この度「新・農業構造改善事業～自然活用型」が上宝村内で進められ、平湯～新平湯～福地～新穂高等々東部温泉地を中心に諸々の整備事業が行なわれています。福地には、ひだ自然館という恵まれたものがあり、それと一体となった「自然・農業体験ゾーン」として、「昔ばなしの里」が新しく造成されました。農林漁業体験実習館が中心で、奥飛驒のクラシックな民家、田頃家と福地家の2棟があります。館内には、講演会、会議等に活用できる大広間もあります。機織り、ワラ細工、木工芸、藤細工などの加工が実際に行なわれており、また実際に自らが挑戦して、できあがった作品を持ち帰ることも可能なようですので、見学に先立ち事前によく打合わせをされるといいでしょう。

この新農業体験ゾーン「昔ばなしの里」には、この他に「炭焼き小屋」「水車小屋」「板倉」なども設けられ、土地の人が今も実際に炭焼き作業をされており、見学することができます。ま

(機織り作業の実演)



(体験実習館の民家)

た種まき、草取り、施肥、刈りとり等々の農作業体験のための実習ほ場、中央を流れる「ふるさとの流れ」、そして雄大な山々を眺めてどっぷりと入浴できる「露天風呂」まで設けられており、ゲートボール場、テニスコート等スポーツの森での疲れをいやすのにもってこいです。

温泉のある農村の将来を求めて、観光と教化施設群が組織化される中で、地元住民にも生活にうおいをもたらし、都会からの訪問客には、健全な余暇活動、自然とのふれあいの場を与え、その中で「相互交流」を生みだそうというねらいをもった、全く新しい試みの野外博物館づくりであるといえます。それだけに、「飛驒の里」などの単なる後追いの模造施設に終わることなく、化石を中心とした自然館と一体となり、しかも地元福地の地に生きてこられた人々が作業に従事されているなど、新しい地域振興への意欲に満ちています。手づくりの「かわら版」が印刷発行され、自由に持ち帰れるなど、教育的な面での配慮

(ワラ細工の実演)

もみられます。全体を通したの共通入場料金は、大人500円、小学生300円、団体割引もあります。他に体験実習は材料費個人負担です。



## 学芸員について思う

日本モンキーセンター学芸部長 広瀬 鎮

“博物館学芸員になってよかった。”この仕事は天職である。”と云ってくれる学芸員にこれまでになかなか会えないでいる。博物館法により学芸員が、博物館の専門職員とされてからもうかなりの年月がたっている。これは、博物館の設置基準が公布されてから、学芸員の博物館において占める位置や、役割りがかなり明らかになったにもかかわらず、現実の博物館界では、学芸員にはどうも十二分な立場の保証がないことに原因があるようだ。

ここでは、学芸員制度や、学芸員個々の素質を問題にするつもりはない。むしろ、学芸員の精神なるものに触れてみたいと思う。

現在日本中に学芸員資格をもち、学芸員として任用されている者は一体何名になったのであろうか。10数年も前から、全国の博物館には学芸員は平均1人しか存在していない、まことにコマ以下の任用でしかないといわれてきた。この希少価値度の高い学芸員も不幸なことに、急速にはふえてこない。

かつては、その原因の一つに学芸員が研究職か、あるいは行政職であるかをめぐって長い論争がつづけられていたものであり、そのうえ、公立博物館の学芸員の多くが、専門職としての任用をされるにいたるまで、長い年月がかかってしまった。学芸員同志の語りあう場はいぜんとして少ないのが現状であろう。

学芸員の身分や、優遇策について果して、当の学芸員から、力一杯の主張や、待遇改善の運動がなされてきたであろうか。残念ながらすすまじい運動があったとはいえない。

もっとも各館の多忙な個々の学芸員にとっては、いずれも学芸活動と研究活動は両立しうるものではなく、日々の苦しみは増すばかりである。

博物館の種類も、規模も、運営の実態も大い

に異なっているので一律には云いがたいが、長年動物園に勤務していると、日本の動物園の職制において博物館学芸員の任用が、制度的にも考えられていない場合が多いのを残念に思う。

さて、近年、私共の博物館へも大学博物館学講座の学生たちの見学学習がしばしば試みられる。たしかに学生たちは変わってきた。従来のように資格取得以外何の関心も示さなかった若者たちは少なくなった。博物館の魅力にひかれて、そこで仕事をしたいと志す何人かの学生にふれる機会がふえてきた。また、1週間、2週間と期間を限った学生実習生を引き受けることも多くなった。志して博物館を学ぶ者たちの意欲は大きいと考えさせることも多い。だが問題は、自らの研究の能力を有し、学問研究の成果を直接的に社会へ還元するのだという社会教育へ目をむけた若者たちは少ないのである。

学芸員に研究や教育に係わる指導をほどこそ博物館は皆無であろう。博物館専門家にもともと要求されるものは高く、それだけに学芸員精神の確立が期待されるようだ。

そうすると、今日の大学養成の学芸員の場合は、博物館経験に関しては全く<sup>ゼロ</sup>からの出発であろう。少なくとも10年の博物館での経験が要求されている。いかにすぐれた素質の者であれ、一つの博物館の蓄積となる学芸研究というのは、短期間ではとうてい達せられぬからである。

学芸員にとって博物館が自らを高める場であるためにも、研究活動への豊かな時間が付与される必要がある。だが、現実には、必ずしも豊かさを保証しえていない場合も多い。生涯学習センターとしての博物館には、今後、ますます教育指導のための学芸員が必要とされてくる。しかしながら、教育・広報・情報等、博物館を社会教育機関として充実した外にむけられたサービス部門のための博物館専門職員の任用は、今日なお充分とはいえないのである。

## 博物館の急増 ～地域住民の多様で高度な要求～ 新しい博物館としては！

第31回全国博物館大会は、昨秋10月13・14日と、新潟市内で行なわれました。大会テーマ「変化の早い今日の社会に対応する博物館のあり方～博物館は今、誰のために何をすべきか～」のもとに、シンポジウム及び分科会が設けられ、地域社会における博物館の機能と活動のあり方、博物館相互連携の効果的施策に目を向けて数々の諸問題について討議されました。その内容を、羅列的ですがとりまとめました。会員諸館園での活動の参考になればと思います。 — 編集部 —



調査・文化財調査、そしてあらゆる情報を収集し、自然や歴史について、「何もかもよくわかっている」状態にあり、そこへ行けば、そこへ問い合わせれば「何でも解決できる」状態にあることが、住民によるこぼれ、地域に支えられる博物館となるための基盤である。入館者数のみで評価するのではなく、地域住民からのこうしたレファレンスの数が、最近急増している傾向も高く評価されるべきである。

◎大小公私立とも、多種多様な博物館及び類似施設が続出しているが、「そこならではの」特色をもつこと、生活と密着した面での特色づくりに努力すべきである。博物館活動は文化活動であり、館の伝統ある行事とは何か……地域ぐるみで活動する季節感ある館園祭みたいなものはできないか……と模索し実践すべきである。

◎地域社会に生きて働きかける新しい博物館とは、名品・すばらしいもの・高価で珍しいもの等を見せてやるといった旧来の視点、一点豪華主義を早く捨てるべきで、身のまわりの生活用品「たらいでも洗濯板でも、歴史的な意味での質の高い資料となりえる。」という発想を根底にした博物館づくり・運営がなされるべきである。

◎社会は生活様式・文化が急変するばかりでなく、生物相・自然環境も変化している。博物館は、これまで以上に、地域からの資料収集・調査研究を推進するとともに、場所を定め、定期

### (1) 博物館と地域社会について

◎社会教育といえば、公民館活動、成人・婦人・青年・老人学級等の集団学習を思い浮べがちであるが、昭和40年代中ばから大きく転換し生涯教育が目ざされてきた。これは「生涯学習」とも呼ぶべきで、学習する側からみての発想が主体となるべきである。博物館は、学習社会という状況の中で、個人学習を援助する教育条件整備という窓からも考え直されるべきである。

◎生涯教育では「まず生涯学習者ありき」である。学ぶ意欲・自己学習の能力づくりこそが中心課題であり、「学ぶことが楽しい」が基盤である。現実の学校教育では、このことがなかなか望めない。「社会教育でこそそれができる」のではないかと、自己学習援助システムの中に、図書館や博物館を位置づける実践研究を、文部省としても全国の中で5県に依頼し実験中である。

◎住民の要求・期待は質的に高まっており、単に自館の館蔵資料についてだけでなく、視野の広い見識が必要であるし、県・国全体までの他館の内容・事情等にも精通しているべきで、幅広いレファレンス・サービスの向上・充実が望まれる。博物館は、地域の実態にそくした自然

的定量的に実態調査を行ない情報を蓄積保存するとともに、その立場にたつて自然保護についても発言していく役割が生じてきたといえる。

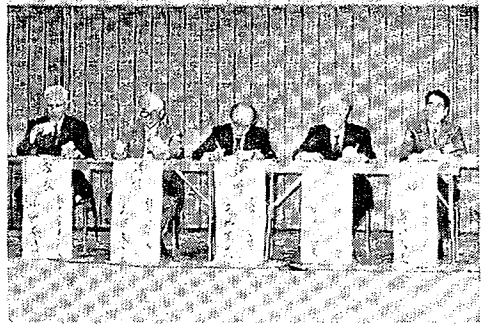
◎「名品・珍品」を見せるという雰囲気でも私立が主導・先進の日本の博物館界も、今では60%を公立が占める時代となり、博物館行政も曲り角に来ているといえる。変化の激しい社会に対応していくといっても、まず博物館としての本来の目的・機能をまっとうしているかどうか、自館で自問、自己評価し、そのうえで、地域社会との接触面での文化活動・行事活動・博物館諸事業等に創意工夫・努力をしていくべきである。

## (2) 博物館と学校教育のかかわり

◎この問題は過去30年間常に新しい課題であったが妙案はない。博物館の展示を学校教育のカリキュラムにうまく合わせたらとの意見もあるが、何度試みても効果はなかった。展示は、学芸員が充分検討し、調査研究の実力をもって、博物館の主張・意志・見解で行なうべきである。その展示を、うまく学校教育に取り入れ活用する術は、学校・教師側の問題である。

◎そのためには、博物館の何であるかを、まず学校教師にこそ知ってもらうこと、博物館を上手に使う下さるような方策を構ずるべきである。学芸員自身が、学校現場の先生方と仲良しになること、先生方に信頼される実力ある学芸員になること、日常の授業での教材研究上の相談相手になること、学校教育の研究会、サークル、グループ等に、学芸員は強くコミットし、仲間となり、世話役・指導者ともなり、その中で博物館利用の上手な教員づくりを目指すべきである。そうしたかかわりの中で、博物館の展示も、学校教育のカリキュラムに追従するだけでなく、必然的に教育的に効果ある展示へと質的に高まっていくはずである。

◎学校団体の見学に先立ち、よく「学芸員の人に解説してもらえませんか」と安易に依頼されることがある。児童・生徒の発達段階に応じ、何をどう教育するか……は、教師こそがその専



門家であり、学芸員はその実態をよく知らない。引率の先生方自身が、博物館の資料を、展示を教材として「学習」をプログラムし指導することこそが教育的である。そのために学芸員は、館の意図はこうです、展示の背景・意義はこうです……と、先生方の事前の打合わせで最大の援助をし、学習指導の陰の相談役であるべきである。館としては、学校教師用の解説書・指導書等をこそ準備しておくべきである。

◎「博物館へ行く」ことの習慣形成が、今後ますます望まれる社会状況となってきた。学校教育の中で、“博物館で学ぶことの楽しさ”を教え、博物館利用の術を、教育内容として取り込む時代になってきた。こうした面で、博物館はますます学校と密接に連携していくべきである。

## (3) 学芸員のあり方

◎学芸員の中味は、少なくとも自然系・人文系に区分すべきである。現在の実態は、「学芸員」は本来の「学芸員補」にすぎないのではないか。長年の研究・研修・実践の成果により、その後1級・2級等に昇級するような質の等級制をとるべきである。

◎社会の未来を察知した学生側に、「学芸員」資格取得希望者が急増している現実の中で、養成制度に問題はないか。司書や社会教育主事の資格取得単位の半分・三分の一という今の10単位でいいのか。勿論現実に各大学では、それ以上の授業を実施したり努力はしている。現実には、現職教育の充実をめざし、国立博物館等への研修制度を活用して、職員の資質向上をすべきである。

◎現状の学芸員の資質向上が呼ばれるが、それでは、いったい「どういう点がどのように弱いのか」を、多くの館園から出し合い現状を分析し、そのうえで学芸員養成制度を根本的に考え直し、具体案をもって文部省へ法改正を要求していくべきである。

◎公・私立にかかわらず、教員は全国ライセンスの「教諭」資格である。司書にしる医師にしる、同じことである。ところが博物館専門職員の「学芸員」だけは、県によってもまちまちな任用のし方、身分の処遇、専門職としての位置づけの不確立等、問題があまりにも多すぎる。「教諭」と同じ水準まで、まず学芸員の処遇・地位の向上・確立が先決課題ではないか。

#### (4)その他

◎多くの博物館は、あまりにも特別展・企画展至上主義で、そのことばかりに追われ、日常的な本来の活動・役割を忘れすぎていないだろうか。学校が学校として機能し、病院が病院として機能することが、地域住民によるこぼれるように、博物館は、まず実物資料をもち、確かな研究成果・情報を蓄積し、多種多様な教育活動を展開すること、その土台の常時活動の充実こそが第一であろう。

◎ただし、美術館のように、特別展等を通して学芸員が勉強し研究し、すばらしい図録等にまとめるなど、その過程で研究機能を充分発揮することができるなどの事情があり、特別展・企画展の内容や方法にもよるといえる。

◎今や、私立相互、私立と公立、公立と公立はもとより、海外の館園との連携まで、国際的な視野をも持つべき時代であり、それは資料の面だけでなく、あらゆる情報、学芸員の連携にまで及んで考えるべき時期に来ている。公立は、何はともあれ税金でまかなわれていることの使命をよく自覚すること、そのうえで、なぜ国立なのか、なぜ県・市・町村立なのか……の原点にかえり、情報化社会の多様高学歴住民の期待に応え、他の社会教育諸施設との連携の場づくりにも積極的になり、こまわりのきくきめ細か



な活動を実践すべきである。

◎従来の地域共同体が崩れ去り、今は新しいコミュニティが模索されている。人々の生活行動圏は広がっているが、地域社会をどうとらえるのか、地域文化の振興のためには、今後ますます博物館の充実が欠かせないが、生涯教育推進事業としては、公私立を問わないことはもとより、地域の企業までも含めた広い範囲内の「社会教育」のあり方を考えるべき時代に来ている。

◎続々と大規模博物館が誕生することはよるこぼしいが、建物・展示・設備等のハード面では豪華で費用がかかっているが、大切な中心柱ともいべきソフト面での、いわば学芸員の質・量ともに弱体でいいのか。特色ある館となるために、学芸員は方法論的にも実践的にも、独自の自分なりの学問を持たねばいけない。現在準備段階にあるところは、学芸員を絶対に「研究職」として位置づけて出発すべきである。分野別に全国公募として採用する場合、修士・博士課程卒で20～70倍もの競争率の事例もある。すぐ現場で使えるとはいえないが、それはどんな会社の技術系職員でも同じことで、まず本人が学芸員としての自覚と実践意欲に満ちているかが根本で、どんどん勉強させ、無資格者ならその後国家試験で取得させればいいし、現実的には、「あゝ、これが学芸員だ」とピリッとすることを持った人へと、現場教育で養成するとともに、学芸員の定着と全国的な実践交流の場づくりの拡充強化が望まれる。

(以上文責：小野木三郎)

岐阜県博物館 資料紹介展へどうぞ！

植物のルーツをさぐる  
ふるさとと北米の植物

2月10日～4月8日までのロングランです。日本と、太平洋を遠く離れた北米大陸、それも東部には、日本の落葉広葉樹林とそっくりな植生景観があります。そこには、春一番にカタクリが咲き、マンサク、エンレイソウ、ズダヤクシュ、サンカヨウと、共通した植物が見られます。新生代第三紀に起源をもつ多くの植物群が共通して見られます。

今回の資料紹介展では、北アメリカのカーネギ自然史博物館から送られてきた標本と、ふるさと岐阜県産の植物標本を対比して展示しながら、地球的視野から、自然史の一こまを紹介します。そして、国際交流が盛んになるにつれ、人為的に運ばれた帰化植物についても、北米から日本へ帰化したもの、日本から北米へ帰化したもの等も紹介します。



(左、日本のエンレイソウ  
右、北米のエンレイソウの一種)



(左、日本のズダヤクシュ  
右、北米のズダヤクシュの一種)

世界各地には、様々な気候条件を反映して、砂漠、サバンナ、ステップ、ツンドラ、熱帯林、針葉樹林等々、様々な自然景観、植生があります。それにしても、北米の東部と共通したものが、その典型例が、東濃地方にあるハナノキであるとは、うれしい限りです。

通常の入館料のままでご覧いただけます。ぜひ会場へお出かけ下さり、大きな視野からふるさとの自然をみつめ直してみてください。

昭和58年度協会加入館園

昭和59年1月現在

- ◎合掌造り生活資料館（忠兵衛）  
▽ 501-56 大野郡白川村荻町  
TEL 05769-6-1435
- ◎大垣市歴史民俗資料館  
▽ 503-22 大垣市青野町 1180番地の1  
TEL 0584-91-5447
- ◎川島町ふるさと史料館  
▽ 483 羽島郡川島町松倉 1951の4  
TEL 058689-2811
- ◎岐阜県美術館  
▽ 500 岐阜市宇佐4丁目1-22  
TEL 0582-71-1313
- ◎岐南町歴史民俗資料館  
▽ 501-61 羽島郡岐南町伏屋 193  
TEL 0582-47-7737
- ◎御母衣ダム展示館  
▽ 501-55 大野郡白川村牧  
TEL 05769-9-2012
- ◎不破関資料館  
▽ 503-15 不破郡関ヶ原町松尾  
TEL 05844-2-2611
- ◎(財)みつばちの家  
▽ 502 岐阜市椿洞 776番地の3  
TEL 0582-94-2002
- ◎斐太彦天文處  
▽ 506-02 大野郡清見村夏厩  
TEL 05776-7-3005
- ◎山岡町郷土史料館  
▽ 509-76 恵那郡山岡町下手向 1805-2  
TEL 05735-6-3611